

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章1-10節>

1 (1) 言葉使いの違いに注目！「幕屋（テント・仮庵）」と「建物」。

「過ぎ去るのでなく永遠に存続する見えないものに注目する」(4:18)と語ったパウロは、続けて明らかに頑丈さに違いのある「幕屋」と「建物」という言葉を使って、今の命と次の命の違いを表現しています。この違いを知ることが、パウロの大胆な生き方を生み出し、それがまた人々の心をとらえ、キリスト教は広がって行ったのです(紀元250年代に起こった疫病時にキプリアヌスが語った説教)。

2 (2-5) 今の命と同様に、次の命も神様から与えられるもの！

「**苦しみもだえる、うめいている**」(2,4)と訳されている元のギリシア語は同じで、それらはやはりこの世の生を「**脱ぐ、脱ぎ捨てようとする**」(3,4)という同じことに対してパウロは使っています。ここで大事なことは、パウロはただこの世の苦しい生から逃れるだけではなく、次に用意されているものを得るための意味ある苦しみとして考えよ、と呼びかけていることです。「**死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために**」(4)で「**飲み込まれる**」という表現が気になるかもしれませんが、これは神様によって用意された嬉しい次の命を大胆に表現するパウロらしい言い方なのです(「**死は勝利に飲み込まれた**」Iコリント15:54)。私たちの今の命は神様から与えられたものですね。それなら、同じ神様が次の命をも用意して下さっているのだと考えることは少しもおかしくなく、むしろイエス・キリストの死と復活を知ったなら、そう考えない方がおかしいと言えるのではないでしょうか。パウロは5節で、神様が聖霊として私たちに働きかけてこのことを教えて確信させて下さった、と語っているのです。

3 (6-10) よって、信仰者にとっては、いつも主と共にある時！

主イエスによって示されたこの「**天にある永遠の住か**」(1,2,4)を知ったなら、この地上の命に固執するのではない生き方に取り組もうとする方が自然でしょう。「**永遠の今**」という言葉があります。地上の人生を生きる中にキリストによって永遠が入り出した信仰者にして分かる言葉です(6-8)。今をどう生きるか？ パウロは言います、主に喜ばれるように生きよ(9)、主の前に立った時に喜んでもらえるように生きよ(10)と。